

寄書

スケッチを精神の修養に

荒井 清文

○僕のスケッチは大に下手であるが、よし下手にもせよ人の作の眞似をせず下手腕を揮つて自ら自然の美を觀察するのかと思ふと、何となく男らしき品性を養ひつゝあるやうで愉快に堪えぬのである、又僕の地方は甚だ平凡だが此平凡の地を何度も何度も探して可なり場所を見出すのは中々進取の氣象を養ふので其の度毎に敢てせずんば得る所なしと私語するのである。

○寫生が初まると我々は御同様夢中になるが其の間は浮世の名利などは洗ひし如くに去つて自然の偉大なる教化に浴し其の美に親しむ事が出来る、殊に曉天を仰ぎて靈光に觸れ夕雲を望みて壯嚴を感じる時は胸廣がり心清うなりて自然と我との間に隔ての無くなる事は諸君も度々經驗せられたであらう。

○要するに寫生が高潔なる品性の修養に適してゐる事は争はれぬ事實である。

○寫生をノンキなりとは誤りである、

ほのぼのと白む黎明の天に低く懸れる紫黑色

○雲が何とも云へぬ程面白きに筆を下せば見る見る天は薄紅を帯び深紅と變じ雲は燐の如くに燃え龍の如くに去る、若し此の時に於て一個敏活の手腕を欠かば畫は常に失敗に終るので中々以てノンキ所ではない。

○寫生を馬鹿氣でるとは誤りである、

西山高く霞をついて聳え天空は一面朱を流して片雲一二黄金に染みつ漂ふに筆採れば何時しか朱消失せ黄金沈みて天地は秒一秒暗又黒に包まれ行く、智者ならずして何ぞ此の瞬間の美を捕ふる事が出来やう馬鹿氣でるとは寫生の味を知らぬものゝ言なり。

○寫生をツマラナシとは誤りである、

一個の幀一枚の花只畫かうとしても然うツマクは出来ぬ、いや出来るとした所で碌なものではない若し之を一々實物に就いて其の眞を畫くとすれば一葉の小畫は良く堂々たる宇宙の大眞理を説くツマラマとは抑も誰がたわごとか。

○要するに寫生が敏活を養ひ觀察力を増進する事は疑を入るゝ餘地がない。

○僕等は、女々しく陰氣な小室に臨本を弄する人には勿論、其の他の人々にも機會ある毎に自然の大學校に入つて寫生をやれスケッチをやれと勧めるのである。

○豐富なる知識を有する諸君の前で此んな事を書いて甚だ相すまぬが「おぼしき事言はぬは腹ふくるゝ業なり」ともあるから。

繪心

せい い う

假令此上の悲惨に遇ふとも所詮忍耐はできない故、斷然決行しようか、

久しく我胸に餘る煩悶を如何にせばやと思ひ煩ひつゝ、朝まだき人なき街道を、とぼくゝと辿るのである、

道の邊りの萩や野菊はたはゝに咲き亂れて並松の間からはら／＼と沖行く白帆、其上に朝焼の雲のたゞまひも面白く、汀には錨卸せし二三の漁船、

噫 好 畫 題、

靜

遊

恍惚として五歩十歩、漸く我にかへつて、

まゝよ、今忍ぶ屈辱は後大を爲す基だ、

名譽も性命も擲つて迄報ひむと思ひし恨も、天然の好景に、湧き出づる繪心の爲め、今や消滅し盡して陶然と酔へるが如くである、顧れば里の炊煙は麓を横に翹き、紅葉せる頂には淡き月が残つてゐる。

文房堂に與ふ

上野白眼生

近時水彩畫の流行は延て水彩畫用具の需用となり、東廬西肆相競て顧客を呼ぶの有様なるも、神田神保町文房堂の如きは蓋し此業の老舗として巨細百備し製品又堅實の稱あれども、頃者新築移轉して新たに店舗を開くや少壯の店員が然も傲慢不遜聲眉曠歩の態度を以て客に接するは大に我輩の意を得ざる所のものなり、敢て諷諷の巧言令色を欣ぶものに非ざるも見やう見眞似に十有二三の木ッ葉下稚に至るまで之に似たる惡風に感染しつゝあるは決して同店の爲めに欣ぶべきにあらず、然も自己が老舗を誇り賣品の饒多を鼻にかけ店頭裝飾の珍奇を衒ひ得て尊大の風を示さんが爲めに如此態度をなすが如きは決して識者の行

爲にあらず亦怜悯なる改善進暢の商業法にあらざるなり、吾輩は如此輕佻の待遇に接する如に彼等が虚榮の憐むべくして心事の懦弱は寧ろ嘖飯に與へすべきも、未だ深く同店を知らざる者や淑良なる婦女子の如きは如此待遇に遇ふ如にその跳梁の風を訴へざる稀なり、蓋し永遠の事業は最も持重切實なるを要す、文房堂なるもの今日の小成功に安ずるなく此の惡風を一掃して然も東都模範的一商賈として益々此業の發達を期さんとはせずや同店を愛するの餘り敢て痛棒を加へて一鍼とす、

樹木の寫生

草 水 生

先頃ある川ばたの崖の上の緑の樹の間から出てゐる農家を寫生しやうとして、げつそり力が脱ける位失敗した、家は兎も角として、木の葉のこんもりと繁つた具合がどうもうまく行かぬ、これは樹や草など個々の研究をやらぬからだ、と考へた、今朝はまた例の河畔に出かけた目的は向岸の槻の木である、暑い七月の日の光は斜に後から射るので、日向と影とは至極明瞭して畦の下を流れてゐる川の水を染めてゐる、そして葉の所々からは晴々した空が透いて見え、前方は半分頃までしか葉が垂れてをらぬ、なんだか底でもかけたやうで暗い蔭の中から數本に分れた堅さうな幹が仄かに見える、ここから右に二間許離れて古い茅屋の頭が出る、――全體の調子が滴るばかり強くて、知らず知らず壯快の感がむら／＼と起る、まづ空から始めて一通り塗る、それが干るまで川畔の散歩、此方岸のさざら波に由